

浅子谷古墳群 現地説明会資料

平成 21 年 1 月 24 日 13:30～

三重県埋蔵文化財センター

遺跡名：あさこだにこふんぐんたかおきたしぐん浅子谷古墳群高尾北支群3号墳・4号墳・5号墳

原因事業名：平成 20 年度道路改築事業 一般国道 4 2 2 号三田坂バイパス

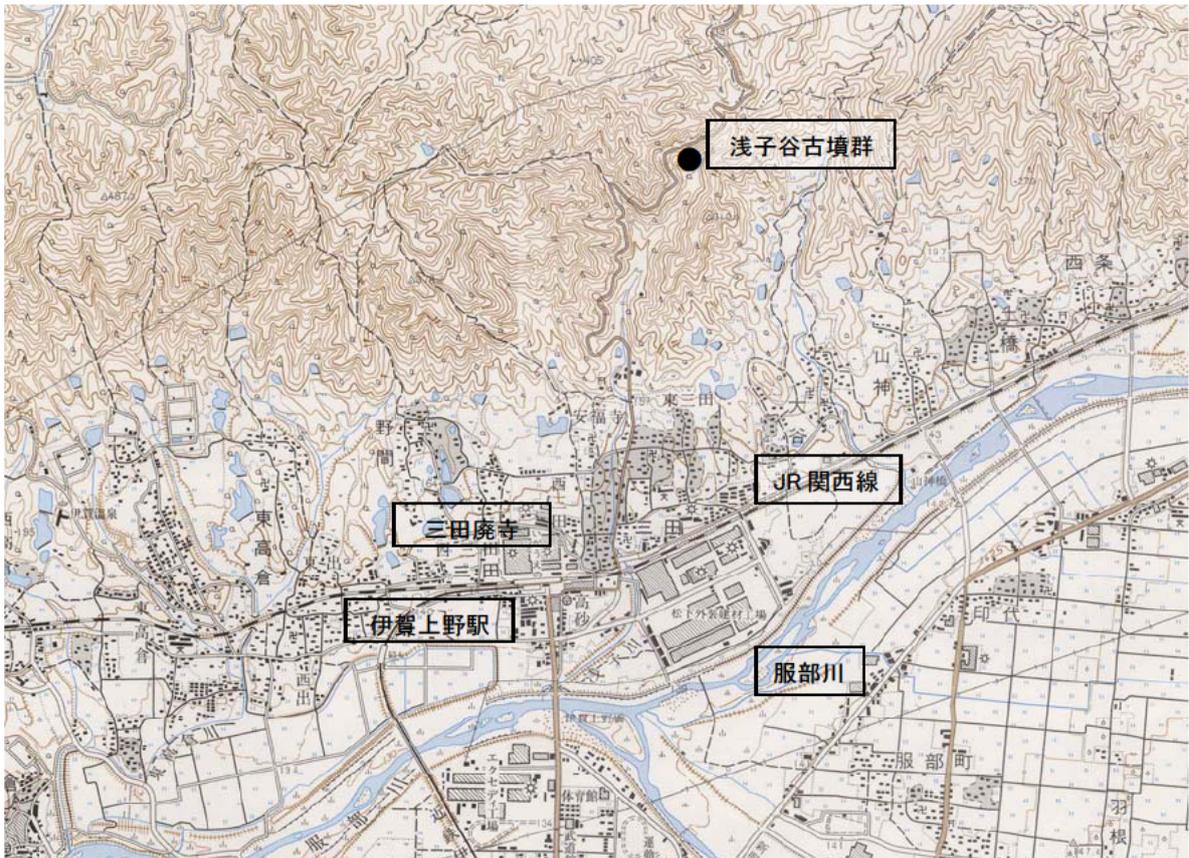
調査主体・担当：三重県教育委員会 まいぞうぶんかざい 三重県埋蔵文化財センター

調査協力：地元自治会・伊賀市教育委員会・伊賀建設事務所

所在地：三重県伊賀市みた三田字高尾

調査期間：平成 20 年 9 月 30 日～21 年 2 月 28 日（予定）

調査面積：約 7 0 0 ㎡



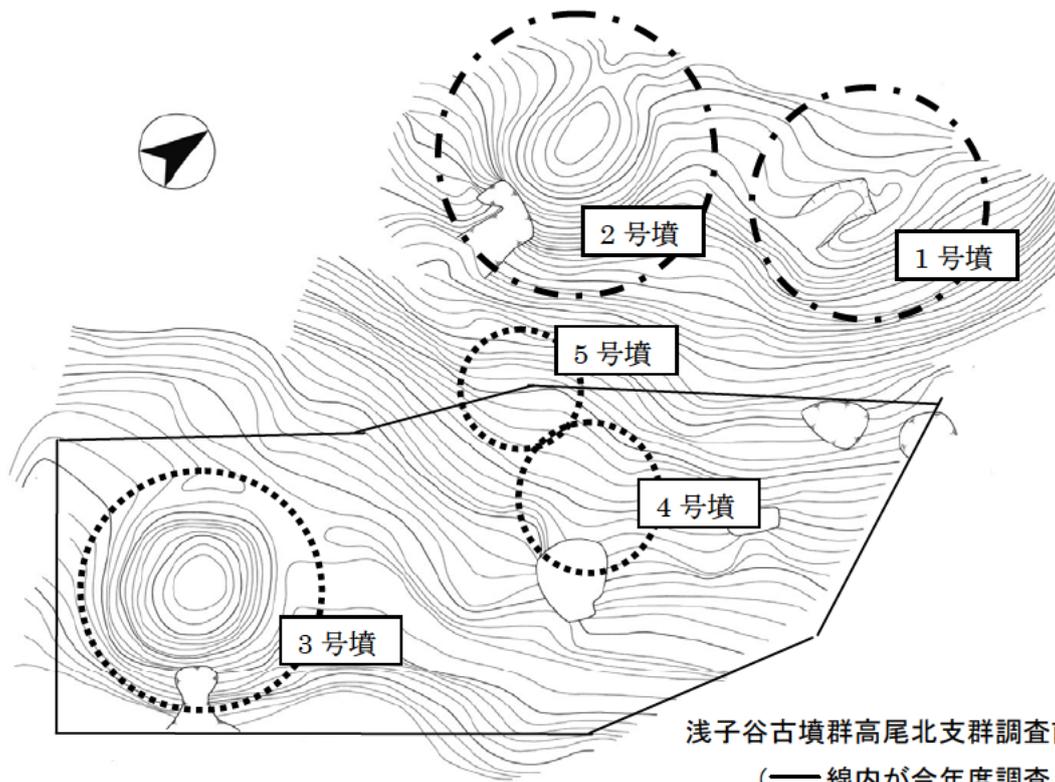
はじめに

遺跡の場所

浅子谷古墳群は、伊賀市三田地区から北に約1.5kmの丘陵部にあります。

三重県埋蔵文化財センターでは、国道422号三田坂バイパス工事に伴い、9月下旬から発掘調査を行ってきました。このたび、その成果がまとまりましたので、現地説明会を行うことになりました。

調査の結果、以前からわかっていた3号墳に加えて、新たに2基の古墳が見つかりました。よこあなしきせきしつない横穴式石室内から見つかった土器から6世紀後半から7世紀中ごろに造られた古墳群とみられます。



3号墳

調査前から入り口の天井石が見えていて、小さな穴が開いていました。墳丘（丸い山）の大きさは、直径約14m、高さ約4mです。墳丘の周りには溝がめぐっていましたが（周溝）。溝を掘って出た土を盛り上げて墳丘を作ったものと考えられます。

死者が葬られている石室は東に向かって開口しています。石室の大きさは全長4.3m、幅2.2m、高さ2.2m。羨道（石室への



3号墳全景(東から)

通路部分)は全長4.7m、幅1.2m、高さ1.4mでした。羨道と石室の境界に石を並べ、区切っているようです。

石室の床には30cm前後の石が敷かれていました。

石室からは須恵器杯身・杯蓋・ハソウ、土師器碗・高杯・壺の他、刀子、鉄鏟、ガラス製小玉、琥珀製白玉などが見つかりました。



3号墳石室内(奥壁から)

4号墳・5号墳

調査区の中央で新たに見つかった古墳です。埋もれてしまっていて調査前にはわかりませんでした。4号墳は推定直径約7m、5号墳は推定直径5mです。それぞれ横穴式石室を持っていますが天井石はなくなっていました。石室の大きさは、4号墳は長さ3.2m、幅1.2m、高さ1.2mが残されていました。5号墳は長さ2.4m、幅0.8m、高さ0.8mが残されていました。

見つかった土器は4号墳から須恵器杯・土師器など、5号墳から須恵器杯・ハソウ、土師器碗などがあり、7世紀前半から中ごろのものと考えられます。



4号墳(右)と5号墳(左) (上空から)



3号墳の石室から見つかった土器



4号墳の石室から見つかった土器



3号墳の石室から見つかったガラス製小玉



5号墳の石室から見つかった土器

発掘調査でわかったこと

浅子谷古墳群は、高尾南支群と高尾北支群に分かれています。今回調査した高尾北支群では古墳が3基あることがわかっていましたが、調査の結果、もう2基、4号墳と5号墳が見つかりました。見つかった土器から3号墳は6世紀後半ごろ、4・5号墳は7世紀中ごろに造られたことがわかりました。

浅子谷古墳群は、^{みた}三田地区から北に約3kmのところにある^{すわ}諏訪地区に通じる林道の脇にあります。古墳群から400mほど北にのぼると峠となり、諏訪地区へ下っていきます。この峠を境に、南側の水は南に流れて浅子川となり、服部川に注ぎます。北側の水は、東に流れて丸柱地区の水と合流し、阿山地区を経て服部川に注いでいます。つまり、浅子谷古墳群は、伊賀盆地の中の小さな^{ぶんすいれい}分水嶺に築かれた古墳群といえるでしょう。いまから約1,450年前に、浅子川の周りで^{おさ}水源を抑えていた一族があったのだらうと考えられます。

また、伊賀上野駅北側には「^{みたはいじ}三田廃寺」という7世紀後半ごろ（約1,350年前）に建てられた古代寺院があります。伊賀国^{あへ}阿拝郡の^{ぐんじ}郡司クラスの^{うじでら}氏寺とされています。3号墳から100年ほど経った頃に建てられたと考えられます。浅子谷古墳群を造った一族が三田廃寺を建てたかどうか確証はありません。しかし、伊賀盆地の北部にいた豪族が、古墳から寺院へというおおきな歴史の流れの中で、中央とつながりその権力の象徴を代えていったものか、あるいは新たな豪族と交代したものか、今後の研究課題といえるでしょう。



浅子谷古墳群から三田方向をみる(北上空から)